

(様式 3)

平成 25 年度学融合推進センター学融合研究事業 研究成果報告書

研究テーマ名称	ニュー・ミュージオロジーの確立のための研究
応募事業区分	「戦略的共同研究 I」
申請代表者氏名	竹沢尚一郎

○ 研究状況報告

25 年 12 月 20 日に研究会を実施した。テーマは「アートか、民族学か」であり、発表者は、川口幸也立教大学教授と竹沢尚一郎であった。

26 年 1 月 24 日に公開シンポジウムを実施した。テーマは「負の文化遺産の保存と展示をめぐって」であり、国立民族学博物館の機関研究との共同開催であった。発表者は淵ノ上英樹立命館アジア太平洋大学准教授と佐々木健大槌町生涯学習課長と竹沢であった。

26 年 3 月 12 日にパリの自然史博物館で国際シンポジウムを実施した。テーマは「21 世紀の博物館の課題」で、ロシア民族学博物館のチスチャコバ、ブダペスト民族学博物館のフォルデッシー、ドミトリー・ゲスティ国立博物館のポポイウとカジャル、日本の川口と竹沢の他に、フランス側からバウシェ、フーガル、オフエールの 3 名が発表をおこなった。

上記の他に、川口幸也が大英博物館で、荻野昌弘がカンボジアの世界遺産の調査と韓国済州島の戦争の記憶にかんする調査をおこなった。さらに、佐々木健が高知市で、平井京之助と竹沢と伊東未来が南京虐殺記念館とソウル近郊の独立記念館、西大門刑務所記念館でそれぞれ博物館の視察と研究をおこなった。

○ 当該事業年度において達成された研究成果・今後の展望等

1 月のシンポジウムでは、原爆ドームや東日本大震災の震災遺構などの保存に関しては時間の経過が必要であり、それを急ぐと住民にトラウマを引き起こしかねないこと、それを避けようと思えば、十分な配慮が必要であることが指摘された。

3 月のシンポジウムでは、東ヨーロッパにおける民族学博物館の展示の動向に関する発表がおこなわれると共に、日本とフランスにおける民族学博物館と美術館、自然史博物館のあいだに協働関係をどのように樹立するかに向けて討議がおこなわれた。

今年度は多くの博物館の視察をおこなったので、来年度はそれをもとに発表をおこなう予定である。また、今年度は博物館の展示の評価をおこなうことができなかったが、これは来年度にはホームページを作成して、公開シンポジウムの成果と共に、一般公開していくことで広く批判を仰ぎたいと考えている。

○ 本研究を基に発表した論文と掲載された雑誌名等のリスト（論文があれば添付）

今のところ無